

ゲーテの革命文学

芳原政弘

第3章 喜劇『扇動された人々』(Die Aufgeregten)

『扇動された人々』(1791/92)は、ゲーテの初期の革命3喜劇の第2作である。第1幕は7場、第2幕は5場あるが、しかし第3幕は1場だけで、あとは散文の説明、第4幕は9場あるが、第5幕はすべて散文の説明に終わり、全体として未完成の形になっている。成立年代は『年代記』の1793年の項に、この作品と『市民将軍』、『ドイツ避難民の歓談』の3つを列挙して、「これらのすべての作品は、最初の起源からすれば、いなその仕上げからしても、大概この年と次の年に属する」(22f.)と述べているが、これは「大概」という曖昧な言い方で、たとえば『ドイツ避難民の歓談』が明らかに1794/95年成立であることからみても、この記述は厳密なものとはいえない。革命を題材とする3作を漠然とひとまとめにいったのだろう。今日では多くは1792年夏の成立とみているが、あるいは執筆は1791年まで遡るとされる¹。なお、ゲーテはこの作品を全集に採用した際に、「政治的ドラマ」という副題をつけた²。

このドラマの舞台は革命の地フランスでなく、ドイツ・ヘッセンの2、3の村である。最初に登場人物の配置からみれば、ドラマの中心人物として革命の信奉者で、理髪師(外科医)プレーメ・フォン・プレーメンフィルトがいる。彼はフランスを手本にして、ドイツの田舎で一揆を起こそうと目論んでいる。彼が参加を呼びかけたのは農民たちで、この村の村長マルティン、近隣のローゼンハイムの村長ペーター、ヴィーゼングルーベンの村長アルベルト、それに若い農民ヤーコブなどである。プレーメを心情的に支持する者として修士(若い伯爵の家庭教師)がいる。

一方、首謀者プレーメと反対の立場にあるのが、領主の伯爵夫人である。彼女は貴族ではあるが、彼女の重要な体験としてパリでの革命の日

撃者であることで、そこから教訓を得て、いわば民主々義的思想を採り入れた貴族である。ブレーメに敵対する立場に彼女の娘フリーデリケと領地土地管理主事がいる。

そしてブレーメと伯爵夫人との中間の立場に、貴族的心情をもつ市民の宮中顧問官がいる。そのほかに政治に無関心な人物としてブレーメの姪ルイーゼその他がいる。

さて、第1幕——場所は市民ブレーメの居間。ルイーゼが政治談議のため、夜遅くまで帰ってこない叔父を編物をしながら待っている。彼女は「フランス革命がどんなよいことを実現したか、どんな悪いことを引き起こしたか、そんなことは私には分かりません。私に分かるのは、革命のお陰で、今年の冬は例年よりも2、3足多く編めることくらいだわ」(134)といている。

そこへ従僕ゲオルクが伯爵夫人の幼い息子カールが大怪我をしたので、すぐに薬の瓶をくれとやってくる。カールは母親のバリ旅行中、修士に預けられていたが、ブレーメ、宮中顧問官、修士らが革命について、新聞や雑誌を読みながら深夜まで議論している間に、修士の監督不行届きで、寝ばけて転んだのだという。幸い、腕のよい外科医のブレーメの処置で大事にいたらない。

第1幕で、さらにブレーメの娘カロリーネに好意をもつ伯爵夫人の甥の男爵が不意に彼女を訪れる。彼女は「人がなんといいおうと、家柄の高貴な方が身分にふさわしい教育をお受けになると、なんという美点が備わることでしょう。ああ、私があの方と同じ身分だったらよいのに」(136)と心ひそかに思っていたが、彼の突然の不躡な振舞に気分を損ねて追いつ返す。そこへ父のブレーメが戻ってくる。彼は外科医の自分に誇りをもち、こんな名医を父にもったことを喜んでくれという。彼女は男爵のことを持ち出すが、彼は娘の態度に感心して、「娘や、そうだ。お前の身分をこれからもお前の徳で飾ってくれ」(140f.)と市民の美德をほめる。

同じ夜に、昼間臨床医として忙しいブレーメは近在の農民の村長たちを集め、一揆を持ちかける。彼は「ご存じの通り、あなた方の村はもう40年も前からお上と裁判で争っている。それは長い回り道をして、とうとうヴェツラー（論者注：帝国高等法院）へ上告された。……領主は夫

役やその他の奉仕を要求し、あなた方は断っている。それは当然なことだ」(145)と、農民を支持し、先々代の伯爵は農民たちとよい関係であったが、この伯爵の死後、その息子(伯爵夫人の死んだ夫)は「乱暴で、邪悪な悪魔のような人だった。何一つ与えようとはせず、あなた方をひどく虐待した。」(145)以前の協定も無視され、協定書もなくなったが、幸いその写しがあって、今それを頼りに協定の回復を求めて、農民たちは訴訟を起こしている。しかし、高等法院の返事を待っていても、いつのことやら分からないので、ブレーメは今こそ一揆の絶好のチャンスで、農夫たちが封建支配によって不当にも奪われた私権を回復せよというのである。つまりブレーメの一揆の目的は、カーペが指摘するように、「新しい権利の獲得でなく、古い権利の回復」であり、イギリスやフランスとは異なり、ドイツの農民や市民は未来への展望をもって革命を行うのではなく、「いわば、後ろ向きに革命する」といえるのである³。

ブレーメはもちろん自分を自由の使徒と考え、3人の農民に対して「善良な諸君は、世の中のすべてのことは前進するもので、10年前にできなかったことが、今日ならできることを知らない」(146)という、マルティンが「おお、そうだ。フランスに今、奇妙なこと」(wunderliches Zeug) (146)が起こっていることは、われわれも知っている」(146)と答える。フランス革命はペーターにとっては「奇妙で、忌まわしいこと」(wunderliches und abscheuliches) (146)であり、アルベルトにとっては「奇妙で、よいこと」(wunderliches und gutes) (147)に思える。つまりドイツの農民にはもう1つははっきりと革命の意義が理解できないのである。集まりにはヤーコブはやってこない。利害に一致しないことがあるからである。

第2幕——伯爵夫人の控えの間。領地管理主事がパリ旅行から帰宅した伯爵夫人に挨拶に来る。彼女は「私はよい道ばかり通って大旅行をほぼ終えて、ちょうど自分の領地に戻ってきたときに、道路が1年前よりもひどくなったばかりか、ひどい舗装道路のあらゆる悪さを兼ね備えたと思えるほど不愉快でした」(153)と、訴訟のため仕事が長く中断されて、道路が悪いままなことを嘆く。しかし管理主事は村民たちに対して彼女よりも厳しい態度をみせる。

次に伯爵夫人と修士の対話。彼は彼女の革命目撃の経験を羨ましく思い、フランスでの解放劇の様子に感激して、次のようにいう。

「あなた様は世界がこれまで眺めたもっとも偉大な行為が起こったとき、現場に居合わせ、偉大な国民がはじめて自由になり、鎖から解き放たれたと感じたその瞬間に、至福の歓喜に酔いしれた有様を目撃するという幸運に恵まれ、私はなんと羨ましく思ったことでしょう。あの鎖はあまりに長く彼らを縛っていたので、この重い他人の重荷が、いわば自分の惨めな病気の肉体の1部になっていました。」(156)

これに対して、伯爵夫人は「私は驚くべきことを見ましたが、嬉しいことはほとんどありませんでした」(156)と答える。これに対して、修士は革命の信奉者を擁護して、「感覚にとって楽しいものではありませんが、精神にとっては楽しいものです。偉大な意図から発した行動を誤るのは、ささやかな意図にのみふさわしいことを行うよりも、つねに称賛に値します。人は正しい道を歩いて誤ることがありますし、誤った道を歩いてうまく行くことがあります」(156)という。修士は自由の美名に酔って、革命を理想化する若者であるとして描かれている。

伯爵夫人とルイーゼとの対話。夫人は娘フリーデリケの父親似の男勝りの「荒い奔放な気性」(157)に困って、面倒を見てくれと、ルイーゼに頼み、彼女の叔父ブレーメもそんな気性なので困るでしょうというと、ルイーゼは「叔父は善良なんです。しかし時々妄想に耽って、そのためにひどく愚かになることがあります。特に近頃、誰も彼もあの政治上の大事件について話をするばかりでなく、参加する権利があると信じはじめてからは、そうなのです」(158)と答える。これは当時ドイツ市民の一般家庭で、フランス革命信奉者が妄想にとらわれていると思っていることを意味する。

第3幕——城の広間。伯爵夫人と市民の宮中顧問官の間で、重要な政治的対話がある。彼女は彼に、「大切なお友達のあなたの良心に心から訴えます。この不快な訴訟にどうしたら決着がつけれるか、よく考えて下さい。あなたの博識な法知識、分別、人間性はどうしたら私たちがこの嫌な事柄から離れられるか、その方法を見つけるのにきっと役立つことでしょう。私は不当な財産を所有したとき、以前はもっと軽く考えてい

ました。まあいいわ、そうして置きましょう。持てるものはもっとも幸せよと考えていました。でも、不当な利益が1代1代と重なるにつれて、とても容易に積み上げられ、どんなに気前のよい振舞をしても、たいていは個人だけにとどまり、利己心だけが、いわば代々相続されることに気づいてからは、また人間の本性は不幸なほど圧迫され貶められても、けっして押し潰したり抹殺することはできないことを、この目で見てからは、私が不当と思える行為は今後一切厳しく避けるようにし、一門のなかで、社交界のなかで、宮廷で、町のなかで、こういう行為について自分の意見をはっきりいうように固く決心しました。どんな不正に対しても、私はもう黙っておれません。どんな些細なことも、大きな見せかけで我慢することはしないつもりです。たとえ民主々義者という嫌な名前で非難されようとも」(160f.)という。

ちなみに、ゲーテは1824年1月4日付の『エッカーマンとの対話』のなかで、この作品について、「私はあれをフランス革命の時代に書いた。いわば当時の私の政治的告白とみなすことができる。貴族の代表者として伯爵夫人を登場させ、彼女の口を借りて、貴族は本来どう考えるべきかを明らかにした。ちょうどパリから帰ったばかりの伯爵夫人はパリで革命の進行を目撃してきた。そこから自分なりのかかなりよい教訓を引き出したが、国民は圧迫することはできても、押し潰ぶせるものでなく、下層階級の革命的な暴動は上層階級の犯した不正の結果であると、彼女は確信していた」と述べ、続けて伯爵夫人は「私が不当と思える行為は今後一切これを厳しく避けることにしましょう。それに他人のそうした行為については、社交会でも宮廷でも、自分の意見をはっきりいうつもりです。どんな不正に対しても私はもう黙っておれません。たとえ民主々義者と思われようとも」と述べて、さらにゲーテは「この意見はまったく尊敬に値するものである。それは当時の私の見解であり、今も変わっていない。けれども、人々はその報いとしていろんなあだ名をつけた。今さらこれを繰り返していう気もないがね」⁴と付言している。

ここにゲーテの立場が簡潔に語られている。つまり貴族の伯爵夫人を革命の目撃者として登場させ、革命の実際とそこから得た教訓を彼女に語らせ、「下層階級の革命的な暴動は、上層階級の犯した不正の結果」で

あり、たとえ民主々義者とみなされても、今後はどんな不正に対してもはっきりと発言するというのである。しかし、ここでゲーテは「貴族は本来どうあるべきか」という、あくまでも貴族に足場を置いた見方をしていることに注目される。ゲーテは当時のドイツの封建絶対主義体制を肯定し、啓蒙絶対君主の改革、つまり上からの改革に期待を寄せているのである。この考えは次の宮中顧問官の言葉にもみられる。

「あなたは書物を通して、私たちを自由に導いた偉大な人たちのお弟子でしたが、今お目にかかり、偉大な出来事の教え子であることも分かりました。この出来事はなによりも思慮に富む国民が何を望み、何を憎まねばならないかについて、生きた概念をわれわれに与えてくれました。ご自分の身分に反対することは、奥様にふさわしいことです。誰でも自分の身分だけしか評価したり、非難したりできません。身分の下からの、あるいは上からの非難はすべて2義的な考えや些末なことが混じっています。身分の同等の者によってのみ、人は評価できるのです。私は市民であるからこそ、市民のままいたいと考えます。しかも国家のなかで身分の高い方の果たす大きな役割を承認し、これを尊重する理由ももっていると考えています。だからこそ身分の高い方々への妬みのこもったくだらぬ嘲弄に対しては、また利己心から生まれ、大袈裟な要求を大袈裟に勝ち取り、形式上の事柄を形骸化して、それ自身現実性をもたないのに、幸せや結果を見ることができるという、たんなる見せかけにすぎない、あの見境のない憎しみに対しては、やはり妥協することはできません。ほんとうに！健康、美、青春、富、分別、才能、環境といった長所ならずすべて長所として認められるべきなのに、私が代々勇敢で世に知られた名誉ある父祖の出であるという長所が、どうしてなんらかのやり方で効力をもってはいけないのでしょうか。私が発言権をもつところでは、このことをいうつもりです。たとえ貴族主義者という嫌な名前を与えられようと」(161)と応答する。

少し長く引用したが、ここにゲーテは封建制の身分制度をそのまま認め、それぞれの分に応じて自分の役割を果たすべきだという考えを示している。貴族も市民もともに、それぞれの身分で役目を果たすべきだという考えは、しかしこの引用の「同等の者によってのみ人は評価できる」

という言葉と矛盾するといえる。つまり身分の相違からいろんな不満が生ずるわけで、基本的に平等にすれば、問題はないのである。しかしゲーテがフランス革命の理念を採り入れ、制度改革をいわないのは、当時のドイツでそれは不可能で、それゆえ上からの改良しか方法はないと考えていたからだろう。この伯爵夫人と宮中顧問官の対話にフランス革命に対するゲーテの根本的態度をみることができる。

第4幕——ブレーメの部屋。まずマルティン、アルベルト、修士など革命に賛成の面々が登場する。ブレーメが鐘を打ち鳴らせば、全員集まってくる準備ができていいる。しかしこの場に及んで、アルベルトはうまくいかないのではないかと不安がる。マルティンは大変なことになりそうだと驚くが、ブレーメは成功すれば、諸君は「国の解放者」(164)という名誉が授けられ、「専制君主に永遠の憎しみを、同志たちに永遠の自由」を誓った「あの3人の偉大なスイス人、ヴィルヘルム・テル、ヴァルター・シュタウプバハ、ウリ侯爵」(164)のように後世に伝えられるだろうというが、そんな大袈裟なといわれる。そして最大の賞賛は、ブレーメにこそ与えられるといわれると、それは「すべての共有でなくてはならぬ」(164)と答える。

ブレーメと伯爵夫人に解雇され、怒っている修士との対話。ブレーメは修士に「この高貴な怒りを見て嬉しいのです。そこでお尋ねしますが、高貴で自由の身に生まれ、自由に値するすべての人間の名において、あなたはその舌を、そのペンを今後自由のために完全に捧げるつもりはありませんか」(166)と、一揆の計画への参加を求める。そして「その瞬間が近づいています。村人たちはすでに集まっており、もう1時間もすれば、ここにやって来ます。われわれは城を襲い、伯爵夫人に強要して協定に署名させ、今後民衆を圧迫する一切の負担を廃止すると誓約させるのです」(167)と修士にいう。修士は承諾し、助言する。しかし彼は理論的関心だけで、あとの実際の一揆には参加しない。

ここで革命家ブレーメはどのように描かれているか見てみよう。

彼の考えは、「……この2人の君主（論者注：フリードリヒ大王やヨーゼフ2世）は真の民主々義者たちが聖者として崇めるべき人でした。あの方々は市民・農民階級が貴族の圧迫のもとで呻吟していたのをご覧に

なって、立腹しておられた。ところが、残念なことに、貴族ばかりに取り巻かれているので、ご自分で行動することができなかった」(168)と、封建絶対主義の啓蒙君主を民主々義者とみなし、これを崇め、その取り巻きの貴族が悪いというのである。

彼が農民たちに一揆を呼びかけるのは、理髪師（外科医）という職業ゆえに大きな政治的影響も与え得ると思っているからである。「私を信じてくれ。人々の髭を剃って、汚い野性的な自然の排泄物、つまり毎日自然に生えてくる男の顎を汚くする髭を取り除き、それによって男の姿を……華奢で可愛らしい青年に似たものにすることほど、政略の必要なものはない」(169)といい、さらにその目的は「いつか自分の生涯と考えを書きとめることができたなら、理髪技術を書いて、人々を驚かせてやる。同時にそれからすべての生活や知恵の法則を導き出そう思うのだ」(169)ということである。彼は理髪理論を書いて、「自分の生涯と考え」を述べ、その理論から「すべての生活や知恵の法則」を導き出すことを考えている。

またアルベルトが「お恵み深い伯爵令嬢様」という言葉を使うと、ブレーメは「お恵み深いはやめなさいよ。もうすぐお恵みするものなんか何1つなくなるでしょう」と民主々義の思想を受け入れている。そして一揆の意義は「われわれは今日祖国の全体のために働くのだ。われわれの村から太陽が昇るだろう」(168f.)という、国全体のための象徴的出来事にしようというのである。第4幕の最後に、失ったと思われた以前の協定書の原本が管理主事のところで発見されるという場面がある。

結末の5幕であるが、散文の説明によると、鉄砲とピストルをもったフリーデリケ、伯爵夫人と息子のカール、ルイーゼ、従僕は地下道を通して逃げてくる。その折り、伯爵夫人は城門を閉ざして迫り来る農民を防ぎ、門扉に例の文書と附属書類をすべて掲示せよと命令する。別の方、ヤコブ、宮中顧問官、農民の1隊がやってくる。宮中顧問官はヤコブに協力して、協定書の原本が発見されたことをおもな論拠にして、扇動された農民たちを説得する。そればかりか農民たちは伯爵夫人らを救おうと決心をする。

一方、ブレーメは武装した農民の1隊をつれてやってきたが、宮中顧

問官とその1隊に出会い、彼も先の文書が決め手となって説得され、全員の満足のうちに幕が終わる。不快な印象を与えたカロリーネ、男爵、修士、管理主事は舞台に現れない。

ブレーメは民主主義の考え方を理解しているようで、その考えと自分の理髪師ゆえの自信で農民を説得し、一揆を起こすが、暴力（Gewalt）を伴うものなので、強制的な協定書の契約は無効だと、修士にいわれると困るような、ずさんな計画である。できないのに、無理に暴力沙汰を起こす1つの茶番劇で、最後は古い協定書の発見で、自分の目的を貫徹したところで妥協する全体が円満に収まる結果に終わっている。

小国分立国家のドイツにおいては、政治的に統一国家のフランスのように、民衆の内部からの変革はとうてい不可能であり、したがってドイツでの革命はゲーテの目にはたんなる模倣と映り、農民たちは実際にはブレーメに素直についていけない。引っ張られてやるのである。しかも問題は新しい権利の獲得でなく、古い権利の回復であるところに、確かに後ろ向きの改革であるということが出来る。したがって、ゲーテは現体制の平和の枠内で現実の問題を解決し、現存の力・身分秩序をそのまま保持することを考え、フランス革命のような急激な変動を警戒して、このような作品を書いたといえるのである。

従来ゲーテについて、ヴァイマルの賢者は絶対君主国の樞密顧問官、あるいはイローニッシュに君主の忠僕（Fürstendiener）あるいは君主の下僕（Fürstenknecht）として体制側に立ち、さながらオリンポス神のように、時代の出来事から超然として、暴動の原因や必然性に聞く耳をもたず、保守主義や反革命の肩をもつ発言をし、さらに革命フランスを敵とする反革命軍の1員として戦争にも参加した。偉大な精神と芸術の持ち主でありながら、結局現実には背を向け、非政治的ドイツ人という例の古典主義像をつくりあげたなどという厳しい批判があった⁵。もちろんゲーテがフランス革命にはじめから味方できなかったのは、先述の通り、たえず自国の状況に目を置いて、自国での革命は混乱を招くだけだと確信していたからで、この作品からも、民主主義思想に対する理解をもっていなかったとはいえない。ドイツでの実現はまだ機が熟していないという考えを基盤にしていたということができる。

ちなみに、先のゲーテ批判に対して、みずから『エッカーマンとの対話』（1825年4月27日付）のなかで、次のように答えている。

「さて、私は君主の従僕であるとか、君主の下僕であるとか繰り返しいわれている。……いったい、私は暴君にでも仕えているのか？専制君主にでも？私は民衆を犠牲にして、ただ自分自身の欲望にだけ生きるような人に仕えているのか。そんな君主やそんな時代はありがたいことに、ずっと前のことだ。……いったい大公（論者注：カール・アウグスト）は個人としては、君主という身分からの重責と苦勞以外に何を得られただろうか。大公の住居、衣服、食卓は裕福な私人のよりはいくらかでもましだろうか。……この間（論者注：治政50年）の彼の治世は、不断の奉仕以外の何ものでもなかったではないか。偉大な目的を達成するための奉仕、民衆の幸福のための奉仕にほかならなかったではないか！だから、私が君主の下僕だと無理やりにいうのであれば、せめてもの私の慰めは、ご自身が公共の福祉の下僕であられた方の下僕にすぎないということだ。」⁶

この言い方はやはり現体制の君主制を擁護する立場であることは明らかである。

第4章 喜劇『市民将軍』（*Der Bürgergeneral*）

1793年4月に数日で成立した『市民将軍』は、ゲーテの初期の革命3喜劇の第3作で、1幕・14場から構成されている。この作品は成立時期からみて、第1作の『大コフタ』が革命以前のパリでの首飾り事件を扱ったのに対して、革命後の、みずから『滯仏陣中記』のなかで、次のように述べた状況下に執筆された。すなわち、1795年の「首飾り事件は、私にとって不吉な予兆であったが、今度は革命そのものがそのもっとも恐ろしい実現として私を捉えた。私は王座が転覆し、粉碎され、大国家がガタガタに揺らぎ、私たちの不幸な出兵のあとは、明らかに世界もガタガタ揺らぐのをみたのである。これらのことがすべて私の頭を攻め立て、不安にしたので、残念ながら、われわれの祖国においても、その考

え方を戯れるように楽しみ、まさに同様の運命をわが国にも準備するものがあることを認めざるを得なかった。私のよく知っている何人かの高潔な人々も、自分と事態をよく把握しないで、ある種の見込みと希望で夢中になっていた。他方、邪悪な連中は激しい不満をいだき、それを拡大して利用しようとしていた。」¹

続けて「自分の錯のきいたうまいユーモアの証言」として『市民将軍』を登場させた。私はその気になったのも、ベックという俳優がいたからである。彼はフォロリーアンの作品を模した『2枚の紙切れ』のなかのシュナプス役で、まったく個性的な素晴らしい演技を見せ、その失敗さえも彼の演技を引き立てるほどであった」²と述べている。

この作品の背景は革命がフランスの国境を越えて、その影響が隣国ドイツにまで及び、政府が危機を覚えて、対仏第1次連合戦争へと突入した時期である。つまりフランスにおける1792年8月10日のテュイルリー宮襲撃、1792年9月の虐殺（この恐怖政治の犠牲者は16,600人という³）、ゲーテも参加した同月のヴァルミーの戦いでの敗北、これに続くフランス軍のライン河左岸制圧、ドイツ最初の共和国・マインツ共和国の設立、フランス国王の裁判および1793年1月の処刑、このような1連の激動の出来事のあとの時期である。フランスの血なまぐさい革命の状況と、とりわけフランス軍のドイツへの進入という恐ろしい事態に対するゲーテの反応としてみることができる。

ゲーテはこの作品の成立について、1793年6月7日付ヤコービ宛書簡に、次のように述べている。「君はこの作品を知らないのだから、知らせなくてはならない。『2枚の紙切れ』の1つはアントン・ヴァルと名乗る作家のフランス人のある作品の模作ですが、それが本名なのかどうかは知りません。この劇のなかに、レーゼ、ゲルゲ、シュナプスが登場します。同じ作家は続編の『系図』を書き、そのなかでは上記の人物に加えて、老人マルティン（論者注：正しくはメルティン）が登場します。今これらの作品、とりわけ最初のものはかなり人気があり、登場人物もすでに知られているので、私もなんの計画の必要もなく、これらの人物を仮面として用い、さらに裁判官と貴族を加えました」（959f.）

この書簡で、アントン・ヴァルというのは、舞台作家クリスティア

ン・レーベレヒト・ハイネ (Christian Leberecht Heyne, 1751-1821) のペンネームで、彼は『2枚の紙切れ』(*Die Beiden Billets*) というタイトルで、1782年に出版されたフランス人ジャン＝ピエール・クレール・ドゥ・フロリアン (Jean-Claire du Frorian, 1755-1794) の喜劇 (*Les deux billets*) を1790年に翻訳した。この作品の成功により、ハイネは翌年自分でその続編の『系図』(*Die Stammbaum*) を出した。

ミュンヘン版の注によれば、この2編の主人公は理髪師シュナプスで、彼は若い農夫ゲルゲからフィアンセを横取りしようとする。ゲルゲは2枚の紙切れを持っていて、それはレーゼの恋文と宝クジの券である。彼はシュナプスに町で宝クジの換金を頼むが、間違って恋文の方を渡す。シュナプスはもちろんそれを利用する。しかしゲルゲはシュナプスを説得して、手紙を宝クジと交換することができる。ゲルゲとふたたび仲直りしたレーゼはシュナプスから宝クジを巧みに手に入れることに成功する。

『系図』では、シュナプスは百万長者の遺産相続者と称して現れる。この見せかけで、彼はレーゼの父、メルティンからは百金貨を奪い、ゲルゲから宝クジの賞品を盗む。しかし最後には化けの皮が剥がされる。(960)

この2つの喜劇はゲーテがヴァイマル宮廷劇場の舞台監督になった1791年1月27日から幾度も上演された。ハイネの2つの喜劇には歴史的な具体性はないが、ゲーテはこの2作をフランス革命と結び付けて、時流の影響を受けない「超時代的で牧歌的な喜劇から政治的風刺劇」(961)に改作したのである。

また1793年6月7日付のヘルダー夫妻宛書簡に、この作品について「私が自分の気分の赴くままに書いたことを美的にも、政治的にも後悔しなかったと思う」(961)と述べ、その前日にフリードリヒ・ユスティン・ベルトウフ宛書簡で、彼の意図を述べている。「専門家がこのドラマに賛意を示し、わずかな美的価値を書き添えて、好意的な考えをもつ人がこれを美的かつ政治的に利用するなら、ドイツの愚かで邪悪な非愛国者を発見するのに役立つのなら、それだけいっそう快いことでしょう。この美しい地方はあの目まいにかかった人物の仕打ちに、何の責任もないのに、なんとひどく苦しんでいることでしょう。」(961f.) つまりこの

作品は革命信奉者の跳ね上がりに対する嘲笑・批判という政治的な意図のものであることが分かる。

1828年12月16日付『エッカーマンとの対話』⁴のなかで、これは当りを取った喜劇で、役者がとてもうまく、シュナプスが持っていた旅行鞆のなかの所持品、革命劇の小道具の口髭や赤い革命帽、制服や剣は、革命当時フランス国境で見つけた本物であるといっている。前作よりもさらに革命家を滑稽で、愚かな人物に仕立てあげた反革命的作品であり、前作と同様にプロパガンダの意味をもった傾向文学である。もちろん短期間でできたもので、革命に真剣に取り組んだ作とはいえない。

さて、作品の舞台は前作同様フランスでなく、ドイツのある村である。登場人物は少なく、主人公は革命の信奉者で、理髪師（外科医）シュナプスで、ほかに新婚の若夫婦ゲルゲとレーゼ、貴族、レーゼの父メルティン、若夫婦と貴族の3人は父の家に住んでいる。さらに裁判官、農夫が登場する。

ドラマのはじめに野良仕事（労働）を喜び、平和で静かな市民生活を賛美する場面がある。新婚の若い農民夫婦ゲルゲとレーゼの会話には、のどかで幸せな生活の雰囲気漂っている。貴族がいうには、「あなたたちを見ていると、時間が過ぎるのに気づかないよ。」(95) これに対してゲルゲ自身も「私たちも気がつかない」(95)と答える。時間が止まったような、ほんとうに平和な生活なのである。

レーゼは「私の父（メルティンのこと）が新聞を読んで、世界貿易のことを心配するとき、私たちはお互いに握手を交わすのです」(97)といい、ゲルゲも「もし老人が外国でとても荒れているのを悲しむとき、私たちはいっそう寄り添って、私たちの国が平和で静かなことを喜ぶのです」(97)という。さらにレーゼは「お父さんがどうしたらフランス国を借金から救えるのかまったく分らないとき、ゲルゲ、私はこういいますわ。私たちは借金をしないように気をつけましょう」(97)と。新聞で報道されるフランスの騒乱に対し、自国ドイツの平穏無事を喜ぶのである。これに対して、貴族も「あなたたちは利口な若者だ」(97)とほめる。ここの貴族と農夫の間には身分の相違はなく、家族同様に話し、また貴族の子供も農夫の子供もいっしょに仲良く遊んでいる。

そこには何ものにも動かされぬ牧歌的な幸せ、秩序、平和の世界がある。つまりこの農民たちは現体制に不満がないのである。ここにドイツの地からフランス革命を眺めるゲーテの視点をみることができる。農民がこんな状況では、革命は混乱を招くばかりか、起こりようがないのである。ゲーテはフランスから振りかかるあらゆる災いを排除しているようである。

しかしこの平穏な村で騒乱を起こそうと考えているのは、前作のブレーメと同じく、革命の信奉者で、理髪師（外科医）シュナプスである。彼はメルティンに、「子供たちが畑に行ったら、あなたを訪ねて、たくさん新しいことを話したい」（100）といている。メルティンは「彼が何でも知っている」（100）ので、その知識に感心し、彼の話に興味を示す。シュナプスはフランスのジャコバン派の秘密クラブに出入りして、「市民将軍」と呼ばれ、その筋から重要な情報や革命の小道具を手に入れている。彼は家人のいないところを見計らって、「単純なメルティン」（128）を訪れ、偉そうに革命の理念を話し、彼の興味を惹くように、理髪用の袋から自由の帽子（赤いキャップ）、自由の制服、サーベル、国民の花形記章、市民将軍用の口髭などの革命家の7つ道具一式を見せ、着用し、「あなたたちの村に革命がはじまる」（105）という。しかしメルティンにとっては、「われわれの村で、このわれわれの村ですって？」（105）と、にわかには信じられない。「市民将軍」といっても「東インド会社の総支配人」（100）くらいにしか思っていない。シュナプスも偉そうぶっているが、実際は臆病で、彼を憎んでいるゲルゲに見つかって、棍棒で殴られるのを恐れている。

メルティンは自分では、「今はもっとも悪い連中がいつも上へ申しあがるとは、実際に奇妙なことだ！新聞を読むと、身分の上の者が、名誉を得ても、今では全然役立たない。この先どうなるものか、誰も分らない。危険な時代だ」（109）という。「銃やピストルをもって、武装して貴族の館へ行こう」（111）というシュナプスの誘いに、「私はいっしょに行きたくないといわねばならぬ。私たちは貴族様に感謝しなくてはならないことが多くある」（111）と、貴族に対抗してなんらかの行動を起こすのは、貴族に感謝の念をもっている自分としてはとてもできないこ

とだと断るのである。シュナプスの話は興味深いが、いざ実践となれば、躊躇するのである。

ところで、シュナプスの狙いは、たんにメルティンに革命思想を植えつけることではない。実は低次元の物質的利得である。つまり空腹なので、うまい朝食を豊かなメルティンから手に入れることである。9場の最初に「俺は彼からせめて朝食を得られたらなあ！ほんとうにけしからん！金持は、いつも面倒だ！」(110)と鍵のかかった戸棚を見て、こぼしている。

この場でシュナプスは社会構造のメタファーとしてミルク沸かし、サワー・クリーム、パン、砂糖などを用いて、人間は自由・平等でなくてはならないと説明する。人々がまだ純粋なミルクのときは、どのミルク沸かしに入れても変わりにはなかった。ところが、今は発酵されて、区別されるようになった。サワー・クリームの下に置かれているのが、金持で、彼らは「上で泳いでいる。これは耐えられないことだ。」(116)その下にあるミルクは「すてきで裕福な中産階級」(117)であり、パンは貴族で、「貴族はいつも耕地のなかで最上の畑を持っている。」(117)砂糖は聖職者で、「聖職者はいつももっとも美味しく、もっとも甘い地所を持っている」(118)と差別の不当を指摘する。

2人で話しているところに、ゲルゲが裏ドアから帰宅してシュナプスを見つけ、一騒ぎが起こり、シュナプスは裏部屋に閉じ込められる。レーゼも帰ってくるが、この騒ぎで隣人に呼ばれた裁判官がやってくる。秩序の番人と自認する裁判官は革命の小道具を見つけて、詮議し、「だから、この家のなかに反逆者のクラブ、背信者の集会、反乱者の拠点がある」(124)、「あなたたちはもう自由の木のための機関をつくったのか？」(124f.)、「こんな悪党が見つけられて、うれしい。……見せしめにされねばならぬ」(125)という。もちろんここでいう「自由の木」はゲーテ自身もそれを描いた、有名な革命のシンボルである。

しかし貴族がやってきて、みんなで事情を説明し、シュナプスも出てきて、革命家の衣装などの入手について述べ、事情が分かり、事態は大事にいたらない。そしてこの喜劇は最後に貴族の厳粛な教訓で終わる。「私たちは何も恐れることはないのだ。子供たちよ、お互いに愛しな

い。畑をよく耕して、家を大切に守りなさい。……老人よ、あなたがこの土地柄や天候を心得て、それに合わせて種蒔きや収穫を行えば、賞賛をかち得ることでしょう。外国のことは、彼らに配慮してもらい、政治的な天候は必要なら、日曜か休日に眺めてもらいましょう。」(129) これに対してメルティン老人は「おそらくそれが一番よいことでしょう」(129)と同意する。

貴族はさらに続けて、「まあ、落ち着きなさい。時宜を得ない命令、時宜を得ない処罰は百害あって一利なしです。領主が誰にも隠し立てをしない国、あらゆる身分の者がお互いに対して公平な考え方をする国、自分なりのやり方を誰も妨げられない国、有益な見識と知識が広く行き渡っている国、そういう国に党派は生まれますまい。世の中で起こっていることは私たちの注意を惹きませんが、全国民を扇動する考え方など影響をもつものではありません。私たちは不幸な雷雲が果てしない畑に電害を与えている一方で、私たちの上に晴れた空を静かに仰げることを感謝しましょう」(129)といい、そしてシュナプスを引っ張り出して、「世界にあんなに多くの災いをつくった、この帽章、このキャップ、この上着をしばらく笑うことができたことはなんと意味のあることでしょう」(130)という。「ほんとうにおかしく」、「ほんとうに愚かな」(130)シュナプスの仮面が剥がされ、罰せられるという典型的な喜劇に終わる。

ゲーテがハイネの作品に新しく加えた貴族は、この作品で重要な役割をもっている。つまりゲーテの政治的見解を表しているといえる。このドラマはけっして革命そのものを笑いものにしたものではなく、革命をドイツへ移植することが愚かなことで、疑問であることを示したものである。つまりドイツでフランスのような革命を意図する自由の使徒、つまり革命家はまったくの茶番であり、エゴイズムであり、混乱を招く愚劣な行為であると痛烈に批判しているのである。他国の問題は他国の考えるべきことであり、自国にそれを持ち込むフランス模倣のドイツの革命家に対して痛烈な嘲笑・批判・警告を浴びせたものであり、この立場がまさに1793年4月時点での、ゲーテのフランス革命に対する回答といっていよう。しかしこの両作品ともに、ほとんど未完に終わっているところから、ゲーテは革命を十分に捉え得なかったのであろう。なぜ

なら、革命文学を喜劇の形で書いたのは、ここまでで、古典期からは別の形式に変えられたからである。

第5章 物語『メガプラツォーンの息子たちの旅』 (*Reise der Söhne Megaprazons*)

この作品（1792）について、ゲーテは『滞仏陣中記』のなかの「ペンペルフォルト1792年11月」の個所で、「革命以来、私はこの粗野な状況から気を紛らすために、奇妙な作品を書きはじめた。それは異なった性質の6人の兄弟の旅物語である。各人はそれぞれ自分のやり方で1つの団体に奉仕して、まったく冒険的で、童話風で、錯綜して、見通しも意図も隠されていて、それはわれわれ自身の状況の比喩話である。人々はその朗読を望んだので、私は気楽にそれに応じ、ノートをもって前に進み出た。しかし、まもなくそれによって感動を受ける人はいないことに気づいた。したがって、私は旅する一家をどこかある港に留めて、それから先の原稿はそのままにしておいた」¹と報告している。

この記述でこの物語のおよその成立時期および執筆意図が分かるが、最初の1、2章だけ書かれたこの断片および残されたシェーマの成立は、高い確実性をもって1792年11月2日以後、つまりゲーテがコーブレンツ滞在中か、フリードリヒ・ハインリヒ・ヤコービのいるペンペルフォルトへの旅の間か、ペンペルフォルト自身に滞在した時期（1792年12月4日まで）に書かれた²。

この作品は明らかにフランス革命をテーマとして、その時代状況を写した、グロテスクな風刺的旅行・冒険小説である。ライナー・ヴィルトによれば、フランソワ・ラブレー（1494? -1553?）の小説『ガルガンチュアとパンタグリュエル』（1532-1564）の、特に第4、5章と繋がりを持ち、そのなかでパンタグリュエルと8人の連れの遠洋旅行が語られているが、この作品の6人の兄弟の名前はラブレーの小説からも採られて、ゲーテはラブレーの風刺的な意図、比喩的な表現方法も比喩そのものも受け継いでいるようである。さらに君主国の島を新たに加え、この

島の3つの区分にフランスのアンシャン・レジームの3つの階級を比喩的に描写し、さらにこの島の地震や火山爆発の自然災害の描写によってフランス革命勃発を表現したのである³。つまりここからテーマが現代に置かれたのである。

この作品はほとんど紹介されていないので、全体を少し詳しく述べながら、考察する。まず第1章は「メガブラツォーンの息子たちは厳しい試練を乗り越える」という表題があって、6人の兄弟が父メガブラツォーンの委託を受け、「先祖のパンタグリュエルが訪れたか、あるいは発見したか」(268)という島をふたたび見つけるために船旅を決行する。

「すぐれた兄弟は、やがて島を発見するという希望を抱いて、それぞれのやり方で仕事に従事していた」(267)が、ある時長男が弟たちに仕事を中断させ、自分の回りに集まるようにいい、懷からカラフルな絹の布切れを取りだし、そのなかにある父の手紙を広げ、朗読する。そこには「メガブラツォーンが息子たちに幸運と無事な旅、勇気と彼らの力の楽しい活用」(268)を願い、「探検旅行でヨーロッパのすべての民族が航海に出て、大洋のすべての地域が探索されたが、どの地図にも、私の粘り強い祖先に最初の発見を負うこれらの島々は記されていないことが分かった」(268)。それらを見つけて、待っている母や妻たちのもとへ無事戻って来るようにと書いてある。

第2章は「2つの島が発見され、争いが起こり、多数意見によって調停される」という表題がある。翌朝、目のよい末弟によって島が発見される。彼は「私に2つの島が見える。1つは右手の、長細くて平坦な島で、中央に山があるように見える。左側のもう1つの島はもっと狭く、もっと高い山を持っている」(270)。他の兄弟もその通りだと同調し、地図で確かめてみる。「右手のこの島が敬虔で親切な民族、パビマネ人の島だ。われわれは彼らのところで祖先のパンタグリュエルと同じような素晴らしい接待を体験したいものだ。父の命令にしたがって、われわれはそこで季節ごとに育つ新鮮な果物、イチジクや桃やブドウやダイダイを食べて元気を回復しよう。新鮮でよい水、美味しい葡萄酒を味わおう。味のよい野菜のカリフラワー、ブロッコリー、朝鮮アザミ、ナベナによって体液を改善しよう。なぜなら、地上の神の代理人のお恵みによって、

すべてのよい果物がいつも実るばかりでなく、雑草もアザミもやわらかく、汁の多い食物になることを知るに違いないからだ」(271)などと、「地上の楽園」(271)を想像する。「われわれは完全に休養し、回復してから、通りすがりに、もう1つの、残念ながら、永遠に呪われた、パピフィグエ人の不幸な島を訪れよう。そこはほとんど育つものがなく、その育つわずかなものも悪霊によって破壊されるか、食べられているところだ」(271)。

しかしだんだん島に近づくと、「末弟が2つの島を長い間、詳しく眺めて、互いに比べたあと」(272)、彼には2つの島は逆に見える。つまり「われわれが向かっている右側の島は丘が少なく、長くて平坦な土地で、誰も住んでいないようだ。私は高みに森も、地面に樹木も村も庭も苗も、丘に家畜も見えない」(272)といい、さらに続けて、「あちらこちらに私は恐ろしい石の山をみるが、それが町々か岩壁なのかいうことができない。見込みのない海岸の方へ行くのは、ほんとうに残念だ」(272)という。

ライナー・ヴィルトによれば、このパピマネ人の幸福の島とパピフィグエ人の不幸の島は、ラブラーにおいてカトリックと新教改革派の国を意味しているが、「もちろんゲーテはおそらく16世紀以来の歴史的発展をみて、状況を逆さまにした。ラブラーのように、パピマネ人のカトリックの島でなく、パピフィグエ人の新教の島が幸福の島である」⁴と注釈している。

そして「左の方の島は？」(272)という問いに、「小さい天、至福の地、優雅で家庭的な神々の住家のような。すべては緑で、すべてが栽培され、どの角や隅も利用されている。あなた方は岩から泉から噴き出し、水車を回し、草原を潤し、池を作っているのを見なくてはならぬ。岩の上に灌木が、山の背に森が、地面に家々が、見渡す限りの広がり豊かな、庭々やブドウ畑や耕地や広大な土地がある」(272)という。

それを聞いて、みんな驚き、頭を抱える。そして地図の書き手が2つの名前を取り違えたのだと考え、「あちらがパピマネ人の土地で、こちらがパピフィグエ人の土地だ。弟の良い目がなければ、愚かな誤りを犯すところだった。呪われた土地でなく祝福された土地へ行こう。それでは豊かで、実り多いものが約束されるところへ進路を取るとしよう。」(272)

反対の兄弟もいたが、父の掟である多数意見にしたがうことになった。こうして兄弟たちは幸福の島（地図では不幸の島）に向かって進んだ。

第2章のⅡは「パピマネ人は隣国に起こったことを物語る」の表題がある。ここからフランス革命の比喩物語がはじまる。パピマネ人は物語る。「この災いはわれわれを非常に苦しめました、しばらくの間、われわれの隣国に起こった不思議な、恐ろしい自然の出来事を忘れているようです。あなた方は北方へ1日の旅程のところにある、大きく奇妙な君主国の人々の島について聞いたことがありますか」(274)。

兄弟たちは知らないで、その話を願い、そこへ行きたいという。語り手は「君主国の人の島はわれわれの群島のなかで、もっとも美しく、もっとも不思議な、もっとも有名な島でした」(274)それは3つの部分に区分され、それぞれ普通「王宮、切り立った海岸、陸地」と呼ばれ、「王宮はこの世の奇跡で、岬に横たわり、あらゆる芸術品がまとめられ、この建物を賛美していた。……あの建物をご覧になれば、神々のすべての神殿がここに均整をもって配置され、すべての民族をこの地の巡礼へと招き寄せたのです。……人々はそれを町、いな国と名づけることができます。ここでは王が壮麗さのなかで玉座につき、全地上の誰も彼に比べられないように思えました」(274f.)この王宮はフランス・パリの王宮を象徴的に描出したものであることは間違いない。

「そこから遠くないところに、切り立った海岸が広がりはじめ、ここも自然の技が無限の努力で助けていた。……すべての植物、とりわけブドウ、レモン、ダイダイが幸せそうに実っていました。なぜなら、海岸はよく太陽に晒されていたからです。ここに身分の高い人たち（論者注：貴族階級）が住み、宮殿を建て、海岸に近づく船人は言葉を失いました」(275)。「第3の部分のもっとも大きなところ（論者注：市民階級の住まい）は、大部分平原と肥沃な土地で、農夫はこの地のために入念に働いていました」(275)「この島は世界で、もっとも幸福な島でありました」(275)。

この幸福な島の3つの領域は、フランスのアンシャン・レジームの王、貴族・聖職者、市民の3つの身分階級あるいはその居住地を指すと考えられる。

ところが、「この樂園のような幸せは、まったく思いがけないやり方で破壊されたのです。前にそれを推測すべきだったのに。自然研究家には、この島が古くから、地下の火力によって海からせりあがったものであることは知られていました。長い年月を経ても、まだその古い状態の痕跡はしばしば見られ、つまり噴石、軽石、暖かい温泉、これに似た徴候があったのです。この島はまた内部からの震動によく悩まされていたのです」(275)。

「ところが、2・3年前平原と切り立った海岸の間の土地の中央で、繰り返し地震が起こったあと、強力な火山の爆発があり、何ヶ月も隣国を破壊し、島をその最深部で揺るがし、島全体を灰で被いました」(275f.)そして「われわれはやがてあの恐ろしい夜に、君主国の島が3つに割れたのを知りました」(276)と、火山爆発(フランス革命勃発)がこの素晴らしい島を破壊し、その結果3つに分割され、2つの部分は互いに猛烈に衝突し、王宮と陸地は公海で泳ぎ回り、舵のない船のように嵐によってあちこち漂流していた。しかし王宮は、まだ数日前に北東の地平線に非常にはっきりと認めることができたと言語する。進むべき方向も分からず、海を漂流する島々の姿は、どうなるか行く先の知れぬ革命の進行を暗示したものだろう。

第2章のⅢは、兄弟たちがこの島の人に感謝して、そこを離れて、互いに穏やかに自分たちの体験した、もっとも新しい出来事を語り合う。話は小人族と鶴との奇妙な戦争に向けられる。この戦争は『イリアス』第3歌によるが、ゲーテは後述のように、『ファウスト第2部』第2幕の「古典的ヴァルプルギスの夜」でも取り上げている。3人の兄弟は「小人たちはまさに恥知らずな被造物のように憎らしい奴だ。というのも自然のなかで、彼らは1つも他のもののために造られてはいない。草原は草や雑草をつくり、雄牛がそれを味わう。雄牛は当然のように、ふたたび気高い人間によって食べられる。自然が小人たちに鶴の救済への能力をもたらしたことは別として」(277)と主張した。一方、他の3人の兄弟は「自然とその意図から引き出されたこんな証明はあまり重みがないこと、ある被造物は他の被造物のために都合よく役立つようにあるためにだけ、他のもののために造られたのではない」(277f.)と主張する。

彼らはこの争いの原因や小人族の頑固さから起こり得る結果について議論し、遂に2つの党派に分かれ、節度を保った議論がやがて激論に変わる。「荒々しい目まいの発作が兄弟たちを襲い、彼らの優しさや仲のよさの痕跡はもはや彼らの振舞いには見えなかった。彼らは話を遮ったり、大声を上げたり、机を叩いたり、苦しみが募った。」(278)。

ゲートは兄弟たちの争いのなかに時代の党派闘争の混乱を描いたのだろう。そこへ見知らぬ船が来て、争いを聞いて、仲介に入る。「問題はきわめて重要だ。よければ、明朝それについて私の意見を述べる。あなた方は眠りに行く前に、私ともう1本マテラ酒をお飲み下さい」(278)といい、最後のグラスを唇から下へ置くと、眠りにつく。翌朝、目を覚ますと、見知らぬ人は兄弟たちに昨夜の争いを笑いながら思い出させ、私の葉は酒を飲みながら話した以上に価値あるものを与えるものはない。「あなたが、あんなに多くの人々が今激しく、いな狂気になるほど攻められた心配から、こんなに早く解き放されたことを幸せといえることができる」(279)という。つまりどんな激論も酒でも飲んで、一寝りし、間を置けば冷静さを取り戻すというのである。

兄弟たちは見知らぬ人にたずねる。「われわれは病気だったのですか？」(279)「あなたは病気に完全に感染していたのだ。私はあなたが恐ろしい危機に陥っているときに出会ったのです」(279)と、見知らぬ船人は答える。「いったい何という病気でしたか」の問いに、それは「時代熱」(279)で、別の人は「新聞熱」(279)とも名づけている。それは「悪性の伝染病」(279)で、空気によっても感染するものだと、ゲートは革命熱に酔った人たちを「時代熱」あるいは「新聞熱」という「悪性の伝染病」にかかっているとみなしている。「いったいこの病気の症候は何ですか」との問いに、見知らぬ人はいう。「あなた方は風変わりで、とても情けない人たちだ。人間はもっとも身近な境遇をすぐに忘れる。自分のもっとも真実で、もっとも賢明な利点を見誤る。人間はすべてを、いや！自分の愛着や情熱を1つの考えに捧げる。それが今やもっとも大きな情熱となるのだ。誰かがすぐに助けに来なければ、ふつう重くのしかかり、その考えが頭に取りついて、いわばそれが軸となり、その回りを盲目的な狂気が回転する。すると、人間はふだん自分の身内や

国家のために役立っている仕事を忘れ、父や母や兄弟姉妹ももはや見なくなる。その罫にはまる前に、とても平和を好み、理性的な人間にみえたあなた方もね」(279f.)。

兄弟たちは地平線に浮かぶこの島を訪ねることに決める。そこで彼らは壁紙を張った秘密の扉を見つけ、いくつかの控えの間に入っていく。話はここで終わっている。

この物語は明らかに比喩的表現で、フランス革命をテーマにしている。ここでは革命は自然災害の火山に喩えられ、その状態は「病気や狂気」として把握されている。日頃穏やかな兄弟が2つに分かれて激論するのは、革命時の党派闘争の激しさを描いているといえよう。ジャンルは喜劇ではないが、ここでもゲーテの革命批判の態度は変わっていないのである。

注

第3章『扇動された人々』

- 1 *Goethe-Handbuch*. Hg. von Bern Witte u.a. Stuttgart: Metzler 1998. Bd. 2, S. 267.
- 2 MA 4・1, S. 133.
- 3 Cape, Ruth I: *Das französische Ungewitter: Goethes Bildersprache zur Französischen Revolution*. S. 56. Heidelberg: Winter 1991.
- 4 MA Bd. 19, S. 493.
- 5 Vgl. Schultz, Gerhard: *Die deutsche Literatur zwischen Französische Revolution und Restauration*. Erster Teil. München 1983. S. 128.
- 6 MA 19, S. 519.

第4章『市民将軍』

- 1 MA 14, S. 511f.
- 2 *ibid.* S. 512.
- 3 フランソワ・フュレノ・モナ・ナズーフ著、河野健二ほか監訳『フランス革命事典 I』みすず書房 1995. 83頁.
- 4 MA 19, S. 275.

第5章『メガブラツォーンの息子たちの旅』

- 1 MA Bd. 14, S. 464f.
- 2 Vgl. MA 4・1, S. 1003.

3 *ibid.* S. 1004.

4 *ibid.* S. 1004.

参考文献

- 1 Bersier, Gabrielle: Reise der Söhne Megaprazons. Goethe, Rabelais und die Französische Revolution. In: Wittkowski, Wolfgang (Hg): Goethe im Kontext. Tübingen 1984. S. 234-240.
- 2 Fink, Gouthier-Louis: Nachlese zu Goethes Die Reise der Söhne Meaprazons. In: Schiller-Jb.34 (1990) S. 257-259.

Goethes Revolutionsdichtungen

Masahiro YOSHIHARA

Die Aufgeregten und *Der Bürgergeneral* zählen auch zu Goethes Revolutionskomödien. Sie sind in einem qualitativ neuen Stadium der Revolution entstanden, als die Auswirkungen der Revolution den deutschen Regierungen gefährlicher wurden und zum Ersten Koalitionskrieg führten. Wie Goethe das Ereignis der Halsbandsaffäre vor der Revolution als ihre „düstre Vorbedeutung“ empfand und es in *Dem Groß-Cophta* behandelte, so ergriff ihn Revolution selbst als „die gräßlichste Erfüllung“. Auf diesem Hintergrund wurden jene beiden Stücke geschrieben. Sie befassen sich daher enger mit der Revolution oder mit ihren Auswirkungen in Deutschland als *Der Groß-Cophta*.

Wie Goethe *Die Aufgeregten* „gewissermaßen mein politisches Glaubensbekenntnis jener Zeit“ nannte, so äußert er durch die Gräfin-Figur, die Zeugin der Pariser Ereignisse, seine Haltung zur französischen Revolution. Nach ihrer Meinung sei eine große Revolution nie Schuld des Volkes, sondern der Regierung. Revolutionen seien ganz unmöglich, wenn Regierungen gerecht und wach wären und durch zeitmäßige

Verbesserungen einer Revolution entgegenwirkten. So erweist er sich zwar als konservativ, aber auch als reformorientiert.

Der Bürgergeneral ist zugleich das antirevolutionäres Werk. Seine Entstehung erfolgte offenbar als Reaktion auf das Übergreifen der französischen Revolution auf das Mititär.

Der Bürgergeneral Schnaps, der das Werk beherrscht, ist eigentlich kein Revolutionär, sondern ein lächerlicher, bornierter Lump. Er benutzt das Revolutionsgerede nur als Vorwand, um einen Egoismus und Geltungstrieb zu befriedigen.

Die Reise der Söhne Megaprazons ist ein Romanfragment, dessen eigentliches Thema die Französische Revolution ist. Die Insel des „Monarchomanen“ ist offenbar ein symbolisches Bild der Stadt Paris, und die Ausbruch der Französischen Revolution wird im Bild eines Vulkanausbruchs geschildert. Hier erscheint die Revolution als eine böse ansteckende Krankheit und ein blinder Wahnsinn.

Die drei Stücke bezeugen Goethes antirevolutionäre Haltung.